

Open Japanese（ニホン英語）をデザインする

BEYOND ENGLISHES : The Design Of The Theory And Practice Of *Open Japanese*, *Open Languages*, And *The Standard Open Language*

末延 峯生 神戸芸術工科大学デザイン教育研究センター 非常勤講師・兵庫県立大学 名誉教授

Mineo SUENOBU Kobe Design University, Center for Design Studies, Lecturer, University of Hyogo,
Professor Emeritus

要旨

人間は本来、親から自然にことばを教わる。母語の学習に失敗した人がほとんどいないのは、ことばは猿人から人類に至る歴史の中で醸造され培われてきたもので、遺伝子の一部として生まれつきその能力がそなわっており、親がそれをうまく引き出しているからだ。だから環境に合わせてデザインすれば、外国語であっても必ずできる。

たとえば、奈良時代に中国大陸から入ってきた複雑な漢字文字は、平安時代の人々がうまく日本語に溶け込ませながら、思い切ったシンプルなデザインとして「ひらかな」「カタカナ」を生みだした。この便利さは今も本場の中国人たちをも羨ませる。

では日本の英語教育はどうか。歴史ある日本文化と日本語を土台としながら工夫しデザインすれば、誰でもある程度はできるといのに、逆に多くの学習者たちの英語離れを生んできた。その原因は何か。本論文はこのような英語教育の状況を「世界諸英語」という視点から、さらに学生とともに授業現場の中でつぶさに分析した上で、日本人の母語である日本語と英語の接点を探りつつ、日本人にやさしい、世界に開かれた第二の母語としての日本語、すなわち *Open Japanese* をデザインしようと試みるものである。

Summary

The language that represents Japan is mainly Japanese. It is called the mother tongue. However, we should call this a “closed Japanese” since it is not intelligible outside Japan. Then, what is the language which represents Japan to the world? It should be comprehensive to the world. So Japanese isn't enough. What should be used, then? What is the language which represents Japan?

For more than a hundred years since the Meiji era, Nihon English (Japanese English) has been used among Japanese people in order to adopt the new culture and as the language of negotiations with the world, and it is still vividly alive among them. It is a precious property which has been naturally influenced and nurtured by Japanese language and culture over the ages. It is appropriate to be called the second mother tongue that represents Japan to the world. I call it *Open Japanese*.

Since Japan has *Open Japanese* that is used to represent the country to the world, India must have already had *Open Indian*, China must have *Open Chinese*, Indonesia must have *Open Indonesian* and so on respectively. In this way, there may have been many kinds of *Open Languages* all over the world and ultimately, there might be one *Open Language* for the whole world in the near future.

はじめに

本学は国際都市・神戸を拠点に1989年に設立され、芸術工学を専門とする大学である。デザイン学部先端芸術学部、それに大学院、デザイン教育センターおよび各研究所を擁し、学生数は1740名を数える。UNESCOから創造デザイン都市として認定されている神戸市とデザイン提携を結んでおり、本学の齊木崇人学長はその統括監として、デザイン都市神戸の「都市戦略」を推進している。「世に役立つ人物の養成」を建学の精神とし、それを支える柱として、思いやりと礼節、基礎的実学、柔軟な思考力、楽しい生き方を掲げるとともに、「これからの社会に必要とされる総合力を持ったデザイナー、アーティスト、クリエイター」を世に送り出すことを目標としている。

1) 英語学習の意義

国際都市神戸を拠点に、学生たちはデザイナーの卵として、社会問題・流行をいち早く知り、自分の周りとは違う世界の存在を認識することで、自己の中身を充実させる必要がある。さらに顧客の関心を把握し、造って売り込むための「引き出し」を増やすための道具として英語が必須である¹⁾。

2) 学生の英語力

筆者は1回生3クラス120名を担当している。英語力は英検でたとえると平均3級程度の実力で、発表力およびボキャブラリーの点で、中・高の基礎が十分でない部分がある。

さて、授業の最初はまず沈黙、そしてこれを脱すると次には質問で中断させられる。「play the piano というのになぜ play the tennis と言わないのですか?」「Help to me! ですか、それとも Help me! ですか?」といった質問が多いが、これは本学だけでなく多くの日本の大学生学習者の際立った特徴のひとつである。

筆者が4月の授業の最初に行った英語に関するアンケート調査によると、3クラス全120名全員が「自分の英語に自信がない」といい、64.7%の学生が「英語が嫌い」だという。95.9%が「自分自身の英語を嫌い」、67.2%が

「一般に日本人の英語を下手」だと思っている反面、76.4%が英米人の「英語をカッコいいと感じ」ている。今後の目標については、30.9%が「べらべらとうまく話せるようになりたい」という希望を捨てていない。39.0%が「別にべらべらとうまく話せなくても、せめて意味が伝えればいい」という。英語が嫌いでも、何とかしなければという気持ちが伝わってくる。

しかしたしかに英語は苦手だが、ただ英語がネイティブのようにかっこよく流暢に話せるというだけの若者とは根本的に違う。しっかりした中身がある。芸術面ではすばらしい能力の持ち主ばかりである。その中身をいつかは人のために公表しなければならないときがくる。だからこそ、英語は自分たちの将来にとって大切な科目である事は認識している。せっかく立派な作品を制作しながら、それを英語で説明する勇気がないために、世界の檜舞台に立てるチャンスを逸するというのは、本人はもちろん教える立場としてつらい。

さらに、アンケートから見てわかることは、現実には「ネイティブ英語の真似ができない」という真剣な悩みを背負っていることがわかる。学生たちは自分たちの発音と文法がネイティブからほど遠く、そのためにほとんど伝わらないであろうことに、極端な屈辱感を持っている。実は、本学に限らず日本の学生たちの多くは、本来決して英語ができないのではなく、それ以前に“ネイティブの英語をそっくりそのまま真似ること自体をためらい、あるいは嫌悪”しているのではないか。

それを確かめるために、56名の学生を対象に「人のことばをそのまま真似ることは好きですか」というアンケートをとってみた。結果、真似をすることが「好き」と答えた学生は25%、「嫌い」は75%に達した。人は誰でも、いわんや思春期にある学生たちにとっては、押し付けられたことばは、どんなことばでも嫌になる。ましてやそっくり真似せよといわれればどんな気がするだろうか。

さて、こうして学生たちの英語学習に対する受け取り方にある程度の確証を得た筆者は、40年にわたって実践してきた日本人らしい英語（以下「ニホン英語」、後半では“Open Japanese”と呼ぶ）のよさを訴えることで、彼ら

をむしろ真似させるというより「方言芸術 (dialect art) としてのニホン英語 (*Open Japanese*) を学ぶ方向に向けさせるための英語授業のデザイン」を試みた。そこで、その処方として、次の二点を授業の柱として取り入れることとした。

3) 到達目標

ニホン英語の意義を理解し、その基礎ができること。ニホン英語は私たちの先輩たちが世界の檣舞台で 100 年以上にわたって使い続けてきた。日本人特有の英語であり、学校以外では日常自然に使われる空気のような存在である。その定義は「日本語体系および、日本人の生活体系が内在する、日本の文化とともに歩む英語」であり、これは次に第一部で詳述する²⁾。

4) 教授方法

学生たちの現状からかんがみて、授業ではたえず勇気付け、「やる気を起こさせる」必要があることがわかった。そのために、まずニホン英語が国際的にいかに理解されているかを認識させる必要がある。開放感を与え、自信をつけさせるため、プラス思考でほめること、これが学生とのレポートの役目になる。はじめは「カタカナでもいい」「間違ってもいい」という癒しを与える。学生の間違いも考え方も、一旦はすべて受け入れて、それを基に教授者側が哲学する。そこには言語の元になる何かが見えるかもしれない。授業そのものがそうしたデザインの結果となる。

こうして本学における筆者の英語授業はニホン英語を土台としたが、本論文では、第一部でその理論的背景とその意義を、第二部ではそれをもとにした実践の方法を論じることにする。

1. *Open Japanese* (ニホン英語) をデザインする

人間は本来、親から自然にことばを教わる。母語の学習に失敗した人がほとんどいないのは、ことばは猿人から人類に至る歴史の中で醸造され培われてきたもので、本能ではないが遺伝子の一部として生まれつきその能力がそなわっており、親がそれをうまく引き出しているからだ。だ

から環境に合わせてデザインすれば、外国語であっても必ずできるものだ。

たとえば、奈良時代に中国大陸から入ってきた複雑な漢字文字は、平安時代のことばの開拓者たちが、苦難の中をひるむことなく「やまとことば」に溶け込ませながら、思い切ったシンプルなデザインとして「ひらかな」「カタカナ」を生み出した。この機能性、便利さは今も本場の中国人たちをも羨ませる。

では日本の英語教育はどうか。歴史ある日本文化と日本語を土台としながら工夫しデザインすれば、誰でもある程度はできるというのに、逆に多くの学習者たちの英語離れを生んできた。その原因は何か。日本の英語教育は、学習者たちの母語との自然な融合・工夫を許すどころか、ただひたすらに一字一句、完全に英米英語を模倣させ、そこに日本語的な要素が少しでも混じることを抑制してきた。その現実、若者の将来を左右する入学試験の問題を見れば明らかである。こんな四面楚歌の中にありながらほとんどの学習者は、自分の英語ができない理由を「自分の責任」だと信じ込んでいる。先生方が一生懸命に教えてくれるのに、「できないのはひとえに自分の努力が足りないから」と自責の念に苦しんでいる。

本論文はこのような英語教育の状況を「世界諸英語」という視点から、さらに学生とともに授業現場の中でつぶさに分析した上で、日本人の母語である日本語と英語の接点を探りつつ、日本人にやさしい、世界に開かれた第二の母語としての日本語、すなわち *Open Japanese* をデザインしようと試みるものである。

1) 「特定の地域に根ざさない言語」はあり得るか

ことばを教育するとき、教授者が抱く言語観いかんによっては、学習者の個性と人権を支配し、その上創造力をも摘み取ってしまうことがある。それは歴史的に見て、たいてい「強制」と「禁止」という手段をとる。

文科省は文部省の時代から長年にわたって、英語教育の規範として英米英語を模倣することを求めてきた。しかし批判を恐れて明言することを避けてきた。2009年に文科省が発行した『中学校外国語学習指導要領解説』³⁾によると、

どんな英語を教えるべきかについて、「特定の地域やグループの人々の発音に偏ったり、口語的に過ぎない…」ように指摘する。これは英語教育が到達目標とする「英語」のあるべき姿を示す、教育現場にとっては非常に大切な指導項目である。

例外なく、人間はこの地球上で必然的にある特定の地域で生まれ、そのグループの環境の中でことばを学びながら育てられる。ところが、どんなグループであろうと、歴史にも文化にも根ざさない、生身の人間、人格を持った人間集団（グループ）に支えられていない、まるで空中楼阁で生まれたような、そんなことばがこの地球上にありうるだろうか。機械語でさえ、特徴を持っているというのに、そんな言語が万が一あるとすれば、それは無色透明で、特徴のない無味・無臭、無国籍な代物、ということになるだろう。このような言語学的にはあり得ないものを目標言語として目指すというのは、あまりにも無責任ではないか。

さらに、『解説』では「標準的な発音を指導し、」に加えて、「正しく発音すること」さらに「音変化に慣れておくこと」とある。現在、日本における英語の「標準的な発音」とは、誰をも知る英米英語に他ならない。こうしてみるとこの指導要領は、英米英語を強制し、それ以外、つまり日本語なまりのニホン英語は認めないことを強調するための口実であることは明らかだ。英米英語もれっきとしたある「特定の地域やグループ」のことばであり、第一、元はといえば借用語でもある。こうした指導要領を、英語教育の現場はどのように理解し、活用しているのだろうか。また、この考えはどのような状況の中で生まれたのだろうか。

2) 三つの模倣

我田引水といわれるかもしれないが、元来、世界から誠実で勤勉な国民と評されてきた日本人は、中でも外国語学習に対して誠実で、努力を惜しまなかった。たとえば自分の英語が相手にわかってもらえないのは、100%自分の責任であり、相手がわかろうとしてくれないのも100%自分の責任だと考える、過度な誠実さがあった。これは、前述のように自責に駆られる現代の日本の若い英語学習者の

考え方に受け継がれている。

そこで日本人の多くは、できればことばだけはせめて完璧に真似て、西洋人、中でも英米人に認められたい、そして同胞であることを認めてほしい、それが美德だとさえ考えてきた。英語教育の世界でも、日本は世界に先駆けて、遅れをとらじと何でもかでもネイティブにそっくりをめざして、先頭を走ってきたつもりでいた。金に糸目は付けず、立派な視聴覚機器をふんだんに使って、これ以上の英語学習方法はないというほどにやってきた。

しかし他国の多くは、ネイティブのまねをするような、そんな金銭的余裕もなかったのも、自分たちの英語でよしとした。またある国では、それ以前に、ことばを物まねするということのおろかさを本能的に知っていた。ことばの本来の意味を知っていた。日本は結果的に言えば、十分な金銭的余裕、それに学校教育で英語を学ぶチャンスが、3年から6年以上という時間的余裕がかえって十分にありすぎたために、発音・文法の細部にわたるまで、そしてついには日本文化の面でも、何が何でも潔癖に完璧な英米の模倣を目指してきた。

それでは英語教育の現場では、実際にどのような形で模倣が行われているのだろうか。最近の日本の中学・高校の英語の授業で、どのような英語指導がなされているかを、身近な英語雑誌を通して一べつしてみよう。

i) 発音の模倣

近所の中学生がそっと教えてくれた。「このごろ音楽の先生まで発音にうるさくなったよ。『バッハの正式な名前を書きなさい』という試験でヨハン・セバスチャン・バッハ」と書いたらバツ。ティアンでないとだめやて。」筆者も昔 Beethoben と書いてバツをもらった。ven が正しいという。お墓まいりに行ったら ben と書いてあった。

いまだに「[r]と[l]の発音の区別ができないと通じない」とか、「ニホン英語ではだめ。この発音ができないと上流社会には行けないわよ」と脅す英語教師。こうして「ニホン英語は通じない」ということば（デマ）が、日本の英語教育の中に蔓延している。まず基本的に、日本人の英語発音では通じないことを指摘している次の一文をお読みい

ただきたい。「もし、日本なまりの発音しか身につけていないと、正しい音声と意味が結びつかないため、リスニングの際にも理解が困難になります。また話していることが伝わらず、誤解を生じさせてしまうような発音では、コミュニケーションをとることができません」⁴⁾。

さて、子どものことばの学習過程では、リズムとともに身体全体、筋肉細胞、脳細胞へと条件反射的に配線されてゆく。このように配線は自然に増殖され、それぞれが均衡を保って成長してゆく。これが自然な言語の学習過程である。ところがそこに突然、自分が今まで慣れ親しんできた日本語以外の、外国語の発音と文法ルールが配線されるとどうなるか。それは発声のための筋肉細胞以前に、まず脳細胞に配線されるため、瞬く間に均衡が破られる。配線の順序が逆になるからだ。

さらに細かく見てみよう。ある音声学者によると、日本人は鼻音[m],[n],[ŋ]の発音が弱いので、指導に当たっては「油断大敵」だと指摘する⁵⁾。これらの発音は世界中の人々が日常ごく普通に使っている音で、ネイティブとほとんど変わらない。また、「Heの[h]音は日本発音の[h]とは違うので、練習が必要」だという音声学者もいる⁶⁾。ここまで来れば半端ではない。学習者を音声学の異音の領域にまで吊り上げてゆこうとする、あまりにも高度な発音指導が要求されている。どれほど多くの日本人が自信をなくすことか。

さらに、[l]の発音を教えるのに、lackの場合、[ヌレアク]と発音せよという。最初に[ヌ]を加えると“スーパーネイティブ”の発音が可能になるというのだ⁷⁾。また、アメリカ英語を真似るため顔の筋肉・口唇・舌のトレーニングを行い、「英語顔」をつくるという涙ぐましい苦勞が描かれている本も市販されている⁸⁾。ちなみに、ある小学校では、1年生に1時間かけて[l]と[r]の発音の指導を行い、難しすぎて泣き出す子どもまで出た。この小学校ではリスニング・テストも実施した結果、英語が嫌いになる子が続出したという。⁹⁾これらの発音の習得には58時間を要するという報告がある。

ii) 細かい文法の模倣

発音の厳格な教育と同じことが、文法ルールについてもいえる。中でも冠詞だ。日本には冠詞に当たる日本語はあるにはあるが、ほとんど日常では無視されてきた。数量の概念もしかりである。最近の入試問題例を見よう。()の中に適切な一語を挿入するのだが、

She is (keen) on flowers.彼女は花が大好きだ。**Like very much** で間に合わせることはできないのか。

I'd (appreciate) it if you would turn out the lights. 電気を消してもらえたらありがたいのですが。**Please** 一語で済まされるのではないだろうか。

Please (refrain) (from) smoking. どうして **stop** ではいけないのか。

Age (deprived) (him) (of) his sight. 彼は年のせいで目が見えなくなった。**Lose his sight** ではだめか。

Kelly (cleared) his throat. 彼は咳払いをした。**Cough** ではだめか。

I (am) not (acquainted) (with) her. は、**I don't know about her.** ではいけないのか。

The boy used to (drop) (in) (on) me. ひょっこり訪ねてきた。どうして単に **visit** ではいけないのか。

Some students study in (earnest), and some don't care. まじめに勉強する学生もいれば、勉強に関心のない学生もいる。**seriously, diligent** ではだめなのか。

I meet him (on)(occasions) at the club. 私は時々彼に会います。**Sometimes** ではだめなのか。

こんなのは何千とある。高校生にこれほどの丁寧すぎる表現を要求する出題者の意図は、いったい何だろうか？

こうした日本人の英語表現、文法能力については、英語関係者はもとより、学生たちの間で高い評価を得ている英文法書がある¹⁰⁾。これは英語特有の冠詞や数量、単複形、語順などを事細かく説明する、一段と高度な“文法専門書”とっていい。たとえば、日本人が使う **I like dog.** や **I eat a chicken.** など、間違った冠詞の使い方をすると、これではネイティブたちに「犬を食べるのが好き」とか「鶏を丸まま食べる」などと解釈されることを面白おかしく警告している。

アメリカ人が自分の国のアメリカ英語の特徴を述べる

のは自由だ。さらに、アメリカ英語と日本語がまったくその源を異にすることを考慮した上としても、アメリカ英語とニホン英語を比較するのもそれは自由である。そしてそれをありがたく拝聴する日本人が多いのも、それは一向に差し支えない。

しかし、そこから日本人の使う英語が自分たちのそれと、ほんのわずかに違っているからといって間違いだと指摘し、英語の自国なまりを強調するあまり、軽蔑的に論じることには沈黙するわけにはゆかない。日本にはよほどのことがない限り、人の言い間違いを揶揄するような悪質な習慣がない。それが教養というものだ。それに、日本人の英語は、すでに世界諸英語という64にも及ぶ英語方言のひとつとして、すでに世界では認知されている。英語の日本なまりを認めないがゆえに、日本国民をはずかしめ、自信を喪失させるのは、言語差別以外の何ものでもない。

それならついでに勇氣を持ってフランス英語、ドイツ英語、さらにイギリス英語にも本を著してクレームをつけてはどうだろう。おおらかな言語文化を背景に持つ私たち日本人が、些細な英米の冠詞や数量の知識の有無のために、入学試験などで利益や不利益を受ける日本は、まさに重大な言語差別社会である。このような、人間の魂までも抜いて壊してしまうような姑息な言語教育を助長することは、厳に慎まねばならない。言語学者田中克彦はいう。

「言語は差異しか作らない。その差異を差別に転化させるのは…文法家的精神にこりかたまつた言語学者…」¹¹⁾ 日本の中学・高校の英語教育現場での英語学習の多くは、このようにもはや発音や文法というより、大学・大学院レベルの音声学、文法学の研究をやっているに等しい。ある学者は、英語の基礎力が十分でない学生に対して「地道に英語音声学・英語音韻論や英文法の訓練をするのが本来的な行きかたである。」という¹²⁾。

カナダにはあらゆる言語なまりを尊重しなくてはならないという法律があると聞く。自分たち自身のニホン英語を蔑む人たちはこれをどう思うだろう。日本人の英語のコミュニケーション行動は、脳幹部が病んでいるといわれる。最近“文法脳”という分野を提唱している英文法学者が脚光を浴びているが、その部分が病んでいるのであろう。だ

から学習者たちはコミュニケーションの初期行動さえできない。それは“文法脳”ばかりを学習しているからだ。樂をして、五感と身体で内在化させる練習を避けてきたからだ。ではどうすればいいか。第二部で詳述する。

iii) 文化の模倣

外国語学習というのは、そのことばを使う国の文化を深く学ぶべきだと信じている英語教師が多い。しかし、一国の文化を外国人が学ぶことがどれだけ大変か。英米とはまったく違った文化の下で生まれ育った日本人が、英語を学び、それを使うようになる間に、どのようなことが起こるか。

- ・一人で二つ分の文化を学ぶ、つまり二倍の文化生活をしなくてはいけなくなる。二重文化、二重人格を押し付けることになる。
- ・母語(日本語)と英語とは極端にその言語構造が異なるが、たとえば、I have a camera in my hand. という場合、「私は私の手の中に一台のカメラを持つ」という、日本人なら日常ではありもしない「誰のもの?」「数はいくつ?」といった契約社会の価値観をたえず持っていなければいけない。学習目的の中身にもよるが、こせこせとした西洋特有の契約社会の片鱗を、日本文化、日本語文法の中に無理やり押し込んでこね回さねばならない。
- ・体系的思考に対して論理的思考と、思考方法も極端に異なる。

・行動様式においても大きな違いがある。文化的ギャップがあまりにもひどいので、自分の位置づけが狂って自分が何人であるのかわからなくなる。自分が日本人であって日本の文化を背負っていることを隠している間に、わかったようなふりをして、英米人のように振舞う必要がでてくる。

以上のようなことを自然に見せかけて振舞うには、精神的に非常な苦痛を伴うが、日本の英語教育者の大半がだまって努力し、同じことを学習者に課している。それでは、たとえば日本人が英語で中国人やインド人と話す場合はどうすればいいか。両者がわざわざそれぞれの文化に加えて、英米文化を学ぶ必要があるか。真の教養人、国際人とは、互いの違和感に適応する能力を言うのであれば、

それは不要どころかむしろ有害である。

このように、前述の指導要領の『解説』の一文が、ニホン英語の発音・文法を抑制し、英米英語に誘うことで学習者たちの自信をいかに失わせてきたかがわかった。ではどうすればいいか。

3) 言語観を見直す

i) English が Englishes に

かつて宇宙はこの太陽系がすべてだと考えられてきた。そしてガリレオの地動説、「それでも地球は回っている」は、私たちの太陽系内だけでの話だった。しかし、ハッブルの地道な観測により、この宇宙には数億、いや数百億個もの銀河系、太陽系が存在し、私たちの太陽系はそのひとつに過ぎないことを証明した。これは宇宙が 200 億年前に創られたことを考えると、つい 100 年にも満たない最近のことである。これにより、私たちの頭に描く宇宙は一瞬にして数億倍になった。

英語という概念にしても同じことがいえる。かつてわたしたち日本人にとっては、英語といえば英米のことだった。それがすべてだと考えてきた。ところが、世界を歩いてみると、全世界に 60 以上のさまざまな英語方言があり、国籍が違ってそれぞれ特徴を持って、助け合って伝達しあっていることがわかった。それに一時は国際共通語と思われるかに見えた英米英語も、単に洗練の域を超えた、わかりづらい英語方言の一つだということも分かってきた。

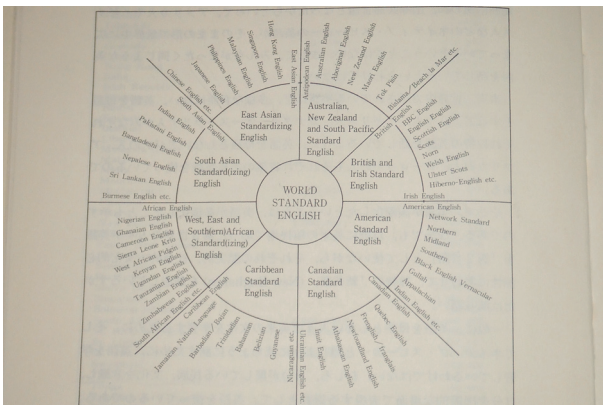


図 1) Tay による英語方言を示す概念図

Tay, Marry “The Uses, Users, and Features of English in Singapore” は現代世界の諸英語を分類したも

ので、Japanese English も堂々と 64 の諸英語の仲間入りをしている（図 1）。諸英語話者は世界で約 20 億人、そのうち 8 億人はそれぞれのアジア諸英語を使っているのに対して、英米人は 3 億 5 千万人でしかない。英米英語は世界中に 64 もある「特定地域やグループの」諸英語のうちの一方言に過ぎないことがわかる。

さらに理解度という観点に立てば、国際間の諸英語としての位置づけから見て、英米英語は最も理解度の低い英語のひとつであるということが出来る。なぜなら伝達率が 55%と、世界で最も理解されない英語のひとつだからだ。ではニホン英語はどうか。伝達率は 75%で、最も理解される諸英語のひとつだ¹³⁾。

ちなみに筆者の調査では、ニホン英語はアメリカの人たちに 79%の伝達率があり、相対的にアジアの英語は理解率が高い。その意味でも、英米英語は英米人の母語であって国際語ではない¹⁴⁾。

たとえば、“My father and I are at my mother’s desk.” を平均的な速度でネイティブが発音すると、and I がリエゾンされ、desk の k は省略される。mai fa: ðn / dai ə / at mai / maðə:z / des / となり、日本人ならば誰もが、「お父さんもお母さんも死んだ」と聞こえる。これを国際舞台で披露したとしても、これもまたほとんど同じ結果となる。英米英語はまさに洗練されすぎた言語である。でもこんな区切り方、発音の語尾省略（かすかには聞こえるが）をしていても、英米人同士なら、たいてい誰にでもわかる。ちょうど大阪人が「儲かります」のことを「儲かりま」と語尾省略をしても理解するのと同じだ。そこで「聞こえない方が悪い」となる。

ではどうすればいいか。国際語を論じるというのであれば、理解度という点からそれにふさわしい英語を見るべきだ。世界各国で最も通じる度合いが高いものについて検証することが第一である。その点では英米英語は皮肉にも極端に低く、最も高いうちのひとつがニホン英語である。

ニホン英語はすでに日本人の先輩たちが、世界の檣舞台で長年にわたって使ってきた英語で、決して完全なものではないが、すでにうまくデザインされているとっていい。それを単に英米英語と比較して、無下に批判するのではな

く、どう評価するかにかかっている。ニホン英語には多くの特徴があり、それらの多くは即、日本人の母語の言語感覚に沿っているものが多い。それを見てみよう。

ii) ニホン英語とは

ニホン英語についての詳細は、拙著『ニホン英語は世界で通じる』（平凡社新書 2010）および *Japanese English—A Study of Japanese Learners' Simultaneous Interpretation*¹⁵⁾ に述べてあるので、ここではその際立った大きな特徴を取り扱いたい。ニホン英語は、わざわざこれから人工的に作りあげるといったものではない。私たち日本人によって 100 年もそれ以上前から日本文化、日本語とうまく絡み合っ醸造されてきた、日ごろ何気なく使っている英語がすでにニホン英語である。ニホン英語が生まれるにいたるまでには、日本文化、日本語、そして日本人独特の国民性といった要因がある。

その特徴は第一に、世界に誇れる高度な日本文化から生まれたこと。第二に、音声および文法の簡便さと伝達率の高さ。第三に、誰に対しても丁寧で、わかりやすい英語だといわれる。日本人は、英語であれ日本語であれ、一般的に外国人あるいはことばに問題を持つ人たちと、ことばを通じてコミュニケーションをするとき、たえず相手の立場に立って、丁寧に分かりやすくしゃべってあげようとする優しい気持ちを持った国民であり、この人格は祖先とともに築き上げてきた宝である。

私たちの社会生活には、条文にはしないが人間社会全体にとって普遍的な取り決めがある。それは相手を思う愛情であり、それが込められたことばは、自然と相手にわかりやすく丁寧な形となって表現される。このようにニホン英語には、聞き手、相手を思いやる深さが自然と盛り込まれている。ここでは日本人が長い期間にわたって、英語ということばの機能を保持しながらより優れたものに築き上げ、デザインしてきたニホン英語の実力を概観してみよう。

iii) ニホン英語の実力

発音：英米英語では母音が 13 個もあるというのに、ニホン英語では、5 つで、ほとんどがそれで用が足せるだけ

でなく、日本語の音声特徴、中でも明瞭度の高い「子音＋母音」の連続（C＋V＋C＋V＋…）を踏襲していることが一番大きな特徴である。また、日本人のみならず世界中の人びとにとっても非常に発音しづらい発音、聞き取りの両面で難度の高い摩擦音 [θ], [ð] の発音を、[s] あるいは [z], [d], [t] に置換することが多い。それは世界中の誰にとっても発音しやすく、聞きやすい、ごく自然で賢明な方法だからである。

プロの世界、たとえばノン・ネイティブの飛行機パイロットや管制官には、この発音の使用はできるだけ避けさせる傾向があるという¹⁶⁾。ニホン英語の発音には英米英語特有のこうした摩擦音・破擦音などの雑音を自然と避け、平易で明瞭度に高い発音を選び、理解度を深めるとするのは、世界諸英語の発音の世界的な明瞭化傾向に大いに貢献している。

文法：日本語の文法界では、日本語には主語がないといわれて久しいが、事実、その傾向はニホン英語にも現れる¹⁷⁾。優れたデザインの作品がたいてい機能を保ちながら無駄を取り除いて単純化されているように、ニホン英語も、英米英語の視点から主語を付け忘れたものと解釈するより、伝達上不要なものを取り除いたというべきである。たとえば金谷氏も指摘するように、川端康成の『雪国』の冒頭の一節、「国境の長いトンネルを抜けると雪国であった。」は、*Going through the long border tunnel, was a snow country.*（参考：The train came out of the long tunnel into the snow country. E.サイデンステッカー訳）簡潔すぎて物足りないと思われるだろうが、汽車というどす黒い物体がわざわざ主語という視点になくても（いや、ないからこそ）、長い旅疲れの乗客の、やっと雪国に着いたという安心感のほうが、一段と読者に生き生き伝わる、不思議なニホン英語だ。ニホン英語では乗客の姿こそが、「見えない主語 (*Invisible Subject*)」なのである。これこそニホン英語でしか表現できない言語芸術の極めつけと、いいものだが、英文法優先、読者優先の翻訳はこれを殺す。これでは何のための文学か分からない。同じく天候を表す無意味な「it」も見えないで、Will tomorrow rain? (*Will it rain tomorrow?*) 「あしたは雨？」とな

り、英語の厄介な「ダメー主語」も、Are you difficult to paint a picture? (Is it difficult for you to paint a picture?) 「あなたにはむずかしい?」と見えなくなる代わりに、聞き手の人間が浮かんでくる。ニホン英語はこうした「見えない魔法の主語 (*Invisible Magic Subject*)」の文学的文法の要素をたくさん秘めている。

次に時制では He work yesterday. When he call me yesterday, I already got in bed. (When he called me yesterday, I had already gotten in bed.)のように時の副詞が時制を担っている。この方法であらゆる時制の複雑さを解決することができ、これを「時制副詞(*Tense Adjective*)」と筆者は呼んでいる。現にインドネシア語には動詞の活用がない。なんと便利ではないか。

受動態でもニホン英語は In Japan is spoken Japanese. や I born in Kobe.のように積極的に日本語の語順を踏襲しているのは、日本語には Japan was visited by Mr.Smith.のように、なんでもかでも主述をひっくり返して受動態にする英米英語の習慣が薄いからだ。これについては、字の示すとおり中国では何らかの害を被るとき以外は英語でも使わない。必ず入試に出る I had my hair cut. の使役動詞も、ちゃっかりと I go hair cut. というように、こうした文型に対する「拒否反応 (*Rejection*)」を自然体でやっている結果なのだ。

次は一般化であるが、活用形を無視して不規則動詞の過去形を teached, swimed; more good, most good のように、-ed, more~, most~ に標準化しようとする「標準化現象(*Standardization*)」がみられる。英米の子どもには学習途上の日常の現象であるのに、日本の子どもは決して許されないのはどう考えても不公平である。

これとは逆に、丁寧すぎると思える「添加(*Addition*)」も頻繁に見られる。We discussed about the problem. He reached to Kobe.のように前置詞などを添加して方向性等に念を押す。人間のことばの冗長度は 70%といわれ、それによって円滑な対話が成り立っているのだから、丁寧すぎて悪いことはない。単純化されることも大切だが、このように添加することで洗練されることもある。語順については、第二部で詳述する。

省略では、冠詞、複数形、数量など、日本の文化にはなじまないものは学校文法で一通り学習するが、それは忘れたからというより、不要なものとして積極的に省略させることが多い。I now mandolin club. (I am now in the mandolin club.) We enjoyed. (We enjoyed ourselves.) I will challenge Mt. Everest next year. (I will challenge myself to climb Mt. Everest next year.)と大切なところを見逃さないで省略する。筆者はこれをニホン英語の「人為淘汰(*Human Screening*)」と呼ぶ。

付加疑問は、文法学者によると 28 ほどの区別があり、抑揚をつけるとその 3 倍ほどになるという。いちいち覚えるには 1 年はかかるだろう。無駄というほかない。これを高校入試に出題している大都市がいまだにある。筆者らはすでに 31 年前に検定教科書で“,right?”の簡便さを推奨している¹⁸⁾。

文化的背景では My answer is yes or no.のようにあいまい表現を使う人がいる。しかし現実には英米人も迷ったときはよく使っている。また、和製英語の“sea moon”は、「くらげ(海月)」にも“jelly fish”にもまして詩的に聞こえるのは筆者だけであろうか。

以上、ニホン英語の教例とその特徴を述べたが、英米文法という面から見ればすべて正解から外れている。しかし、ところどころに日本語の名残り、よさをちりばめており、社会言語学的に見た場合、ほとんどすべての意味は理解できるという点で、優れた世界諸英語のひとつとして、世界的に認知されているデザインである。

iv) ニホン英語から *Open Japanese* へ

今まで見てきたように、英米英語は音声的にも文法的にも洗練されすぎた諸英語のひとつで、リエゾンや省略の極端に多いことばになっており、皮肉なことに、学習すればするほど国際的には通じなくなるという結果になる。にもかかわらず、日本の英語教育は、この矛盾に学習者を順応させることに努力してきた。

しかし、これが無意味というよりあまりにも愚かであることをすでに見抜いていたごく一部の人々の間では、聞かせる側の責任としゃべる側の責任はともに 100%とはいえない

いまでも、せめて同等で助け合うべきだと考え、「日本人英語 (Japanese English) 」を使うことで十分ではないかと提唱し始めた。そこで、日本人学習者の目標とする英語に対して、先輩たちは“English”ということばの枠内で、ジャパニーズ・イングリッシュ、ジャパリッシュ、ジャングリッシュ、イングラント、等々といったいろいろな名称を思い巡らし、提唱してきた。

ところが今やその見方さえ古いものとなった。その理由は、第一にこの国際社会の中で、英米人たちは今、自分たちの英語が世界を相手に通じないことで苦しんでいる。日本が模範にしてきた英米英語が、今や危機的状況にあるのだ。彼らの超モダンな文化の中で、母音だけでなく子音さえも省略し、不可解で膨大な慣用句が他を寄せ付けない。こうして洗練されすぎることばは、世界の人々の間では 5 割程度しか理解してもらえない。逆にいいねいなニホン英語は 8 割がた理解される。この現実を変えるには、シーソー・ゲームのように、彼らが自分で歩み寄りしかなくなってきた。

第二に今や国際市場での取引の大半が、アジア市場、つまり英米英語以外のアジア英語で占められているからだ。それぞれのアイデンティティをしっかりと土台にすえて、堂々と貿易をやっている彼らのアジア英語には、英米英語を使っているという気持ちは微塵も見られないどころか、現実には自分たちのアジア英語を堂々と使っている。その中にはもちろんニホン英語を使う日本人貿易者も含まれる。

このように英米英語は、世界中でも最も伝達率の低い英語だといわれるように、それはもはや国際共通語ではない。こうした世界の現状とのギャップによる誤解を避けるためには、むしろ English という特定の地域の一方言としての名称を取り除いて、その中身にもっともふさわしい学術用語が必要である。

我々日本人の英語も、もはや「外国」語ではなくむしろ日本人の第二母語、すこし大げさに言えば、国際社会に向けての「開国」のための母語である。それは日本人が英語に歩み寄ったという意味ではなく、逆に、日本人にとって英語は異物でもなく、外国語でもなく、日本人、日本文化

の中に取り込んでしまった、体内に溶け込んだ言語であり、もはや English を冠する必要がなくなったと解釈できる。インド人がしゃべる英語を見れば、もっとそれがよくわかる。彼らは決してかつての植民地時代の英国英語を借りて使っているのではない。端から見ていてもすでにその源となった英国の域を脱し、インドの人々自身の言語となったことが伺える。こうした世界の諸英語の傾向を早くから見据えてきた本名信行氏は、「英語はもはや外国語ではない」という¹⁹⁾。

周知のとおり、世界にはさまざまな固有の言語が存在する。たとえば日本語、中国語、ドイツ語、英語、など、それぞれは基本的にはその特有の地域内で使われることが多いので、総称して閉ざされた諸言語(Closed Languages)、そしてその各々は Closed Japanese、Closed Chinese、などと呼ぶことにする。(図2)

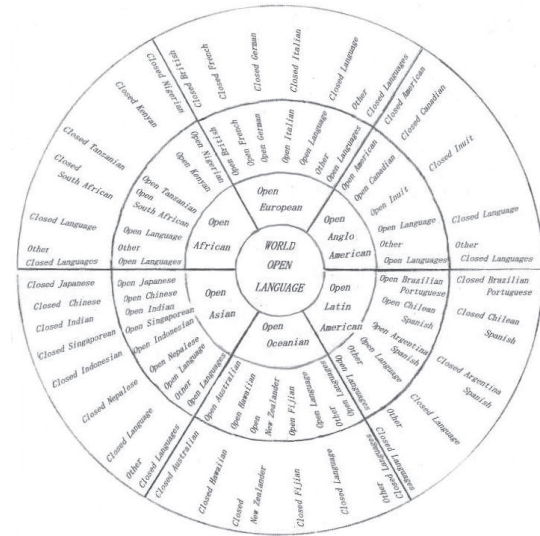


図2 Open Languages in the world by Suenobu

そしてそれぞれの特有の地域の話者が、世界共通語としての英語、つまりその特有の地域内で固有の英語を使うとき、それぞれ固有にデザインされた言語の一つ一つは、新しい皮袋に入れる必要がある。それは世界に「開かれた日本語(Open Japanese)」、「開かれた中国語(Open Chinese)」というように広がってゆく。それら一つ一つの集合体は「開かれた言語群(Open Languages)」であり、それが共通の言語になったとき、それを総合して「開かれた言語」、すなわち Open Language となる。これにより、もはや各々

の *Open Languages* は *English* でなくなり、規準という感覚から外れるので、上手下手という差別が消える。このようにして *Open Japanese* は、他の 60 以上にも及ぶ *Open Languages* の中で先導的な役目を担いながら、将来、世界の規準となる丁寧でわかりやすい *Open Language* への発展に大いに寄与することが期待できる。日本は国際化を目指して、青い鳥を求めて完璧な英語を模索してきたが、結局青い鳥は私たちのすぐ手元に *Open Japanese* としてすでに私たちの先輩たちによってデザインされた存在であった、ということになる。

第二部では *Open Japanese* を土台にして、その実践の一端を披露する。

2. *Open Japanese* を教える

ここでは、何をどのように教えるかについて述べる。

さて、ここで筆者が日ごろ行っている *Open Japanese* を基にした授業の内容の一端を披露する。教える側にとっても、学習者にとっても *Open Japanese* を目標とするというコンセンサスが得られた時点では、細かい発音や文法から開放されて、ずいぶん気分が楽になることは確かだ。しかし、枝葉を払った *Open Japanese* の教育は、ここで本当に大切なものが見えてくる。

1) 授業理念

言語は学習者たちが中学および高校時代に学んだような、単に頭で文法事項を覚えたりする方法から脱却させ、次のような過程のもとで行う。

i) 体得

一輪車に乗れるようになるのと同じく、五感、中でも耳、目、口をはじめ全筋肉を通じて、トータル・フィジカル的に繰り返し練習しながら“体得”させることが最も重要である。そのためには単に頭で文法事項を覚えるのではなく、五感、中でも耳、目、口をはじめ全筋肉を通じて、繰り返し練習しながら“体得”させる。

ii) 間違いを見守る

母語であろうと外国語であろうと、ことばというのは、

はじめて発する語や文はだれにとっても勇気のいるものである。それをいきなり矯正されてははずかしめられるのは、大人であっても子どもであっても心がすさむ。いくら教育の中でとはいえ、相手のことばに口を挟むのは許されない。そのことをことばの教師は十二分にこころえておく必要がある。少々わからなくても推理すればいい。どうしてもわからなければ問い直せばいい。間違いを見守ることこそことばの教師の役目である²⁰⁾。

たとえば、*I like apples.* で *apples* の *s* が抜けていてもしばらくは指摘しない。つぎに *I like to eat apples.* の *to* が抜けていても指摘しない。そのうちに聞く回数が増えると自然にモデルと自分のが違うことを発見し、少しずつ矯正されてゆく。できれば自己矯正が始まる頃には大いにほめてやると、そこにも集中しようとするようになる。

学生の中には基本的ともいえる *taught, caught* など般化の傾向が多く見られる。これも *Open Japanese* の特徴でもあり、いちいち指摘することは話者の発話リズムを狂わせることになり、極力避ける。見逃していても周りの友から学び、自然と正されてゆく。間違いを見守る中に、間違いだと思っていたことが間違いではなく、大きな示唆を与えてくれることがある。

たとえば、母が子の間違いをそのまま繰り返している場面に遭遇する。これは決して間違った教育ではない。筆者は *[r]* の発音を教えるとき、英米の子どもたちがやるように、*grass* は極端に「グアス」、*write* は「ワイト」、*rabbit* は「ワビット」と *[w+ə]* を発音している。そうすると学習者たちは、ついには *[l]* との違いまではっきりと区別して発音できるようになる。子どものエラーと母親の対処の仕方から、教授法を編み出すことができるという一例だ。

2) 到達目標

- ・日本人にふさわしい *Open Japanese* が、世界に開かれたことばであることを認識させつつ実習する。

- ・単に「教養を高める」というおぼろげな目標、ネイティブの英語に近づけるといった非現実的かつ無意味な目標は削除し、学生の将来を見据えた現実的な目標を目指すために、基礎的な *Open Japanese* を使えるようにさせる。

こうして学生たちにもう一度英語の面白さを吹き込み、興味を芽生えさせる、たとえば「一輪車に乗れるようにさせること」というのが教師としての私に与えられた仕事だ。うわべの社会儀礼が英語でこなせることよりも、むしろ専門分野でやり取りができる、たとえば自己表現ができる力、ひいては *Open Japanese* を通じて堂々と世界の檜舞台で自分の作品を紹介し、討議できるようになるための基礎を培う。

3) 授業の流れ

週一回、90分授業で、全15回授業。クラスの構成は1クラス40名で、計120名。英語力は3名の準2級を除き、全員英検3級程度である。ここで全22時間30分の時間で、何をどのように教えるかについて述べる。

1クラス40名を6つの班に分けて、次のような流れで授業を進めた。（およその配分時間を示す）

- ・パタン・プラクティス（20分）：（前回授業の復習も加える）
- ・ターゲット文型（後述）は中学3年生から高1程度のものを使用。
- ・カード・ゲーム（15分）：
百人一首と同じ要領で、読み手が上の句から下の句へと読んでゆく。それを競い合って取らせ、出席カードに枚数を記録させる。
- ・英字新聞読解（20分） 推理力の養成：当日の英字新聞のヘッドライン（毎回5項目程度）、あるいは短めの芸術工学に関係のある記事を選んで、板書あるいはプリントして配布する。
- ・ターゲット文型を使った、各自モノログ練習（15分）
- ・ターゲット文型を使った、対話形式でダイアログ練習（20分）

4) 授業教材とその内容

i) 絵カードの製作と使用

百人一首の上の句（形容詞または動詞）、下の句（名詞）の原理を応用したもので、筆者が製作したカード・ゲームおよび学生が製作したカードを使用した²¹⁾。動詞+名詞

約150枚および形容詞+名詞約300枚の中から、適宜計約300枚程度を使用した(図3)。



図3) 筆者が製作したカード・ゲームの一部

さらに市街図のようなパノラマを描かせ、使用した。また7週に一度、学生たちにターゲット文型をもとにした各々8枚の自由文とその絵カードを課題として描かせた。芸術工科大学だけに、プロフェッショナルな作品が多かった。

ii) ターゲット文型の選定

ターゲット文型の選択については、中学・高校2年生程度の英語教科書の中から頻繁に使われる構文をまず100文型を選び、そこからさらに1 Semester（15回90分授業）の中で消化できる量約45文型を選び出した。その際規準としたのは、比較的文法的にも易しい、日常生活で頻繁に使われる短い構文を中心に、欲求文、要求文、勧誘文、命令文など、単文から重文へと移行することであった。複文は日本人にとって困難なため、最初はなるべく避けた²²⁾。単語は社会生活一般、それに芸術工学に関するものを選択して使用した。

iii) 語順

中でもターゲット文型を考えるにあたって、最も重要と思われるのが語順である。そこで特に詳細に解説する。日本人には当然、日本語の語順が頭にこびりついている。それは日本人の思考順序そのものである。しかし、日本の英

語教育では、わざわざ SVO の順序から始める。それはなぜか。文法も発音もそして文化も、日本語にはない一番間違いやすいところを収集して、そこから始めるのが言語学的に最も効果的だという。

学習者のことを真っ先に考えるどころか、英語の特徴、つまり子どもが間違えやすいところ、子どもにとって不利なことばかりが最初から並ぶ。日本語と英語の差異ばかりを教えて、英語を強調するという、何もかもネイティブ志向の言語学のしわ寄せが、このようなところに現実の姿となって現れる。では肝心の教育的にはどうか。立場を変えてみよう。

関係代名詞が日本語として発達してこなかった理由は何か。それは後置の名詞修飾節が長つたらしい上に複雑だったからである。「昨日見た映画は面白くなかった」より、「昨日映画を見たけど、面白くなかった」のほうが発想的にも思想的にも簡単である。名詞修飾節が“重く”て日本では育たないのだ。

英語も日本語も、古くは語順が自由だったという点で、幸いにも現代英語にも日本語と同じ語順が多い。だから教科書を「一匹の大きな黒い犬→ A big black dog」から始めていけないわけがない。

日本人には当然、頭にある日本語の語順が英語でも一番口に出しやすい。だから当然、ニホン英語には日本語の語順を使用する傾向が強く見られる。やはり日本人にとっては母語の語順に準じた、口に出しやすい順序でしゃべるほうが、母に抱かれた気分ではっとする。意味的にたいした支障がなければ、日本文化を踏襲した語順が一番似合っているといえる。日本語の語順と違う文型は難易度が高いから、はじめは除外する。このようにできる限り学習者の負担を軽減することに心がけた。たとえば、些細なことに思えるかもしれないが、学習者にとっては、I got up at seven this morning.よりも、This morning, I got up at seven.のほうが断然しゃべりやすい。なぜなら日本語の思考順序を、ほとんど変えずに言うことができるからである。また、It ~to~.の形式上の主語（仮主語）の構文についてももちろん読めることは大切だが、この順序でいきなり口に出すことは、日本人にとっては断然難易度が高い。こ

れよりも To study art is ~.のほうが日本人に向いているから、これから先には始めるのがよい。

また *Open Japanese* では Japanese Kobe's people といった所有格が多用されるように、わざわざ the City of Kobe のような多文字を使うより、ニュアンスが少々ぶれても Kobe City でいい。これは決して日本独自の語順ではない。中国人たちも「中国の北京大学の英語教授」のことを professor of English at Peking University in China とはいわず、*Open Chinese* で China's Peking University's English professor と同じ語順で表現するように、多くの *Open Languages* にも見られる傾向である。*Open Japanese* では This is the picture of my father. より This is my father's picture. のほうが言いやすい。

だから、英作文の訓練でも、教師はまず、英語の順序で日本語を設定し、学習者にはそのまま日本語の順序で英語を書かせるように誘導することからはじめるとよい。

- ・私、好きなのは魚だ。→ I like fish.
- ・私、起きるのは7時でそれは毎朝。→ I get up at 7 every morning.
- ・私、思うにはつまり～ → I think that ~

以上語順の問題について述べたが、これは「英語の語順を日本語の語順に仕向ける」、つまり「語順の日本語化（Japanization of English Word Order）」という *Open Japanese* の特徴のひとつを、無理やりではなく、自然なかたちで世界に向けて紹介することにつながる。こうしたやり方でじわじわと日本語の紹介を行うことができる。次に専門上、学生の行うプレゼンテーション、ディスプレイなどのために有効な完了形、関係代名詞、仮定法などの構文を加えた。

iv) ことばの創造性

ターゲット文型を決めるに当たって考慮すべきことを、もう少し深く述べる。私が時々教えている近所の中学生の素朴な質問から、はっとさせられることがある。「Have you ever~? の完了形の have を、『持つ』と考えてもいいのでは？」というのだ。学校では、口すっぱく「いままで習った have とは全然違う」と警告されたという。筆者

は学生時代英語学の授業で、たしか完了形の **have** も歴史的に「持つ」を意味する **have** からきていると習ったことから、元来「持つ」の意味があつて当然で、筆者も自然とそう教えてきた。だが、調べてみると、教育現場では完了の **have** は「持つ」という意味の動詞ではなく助動詞だと、あくまでも文法中心に教えているようだ²³⁾。しかし完了形の **have** も、話題の当事者が「経験、完了・継続状態を身の内に所有する」のであるから、品詞が違っただけでわざわざ違うものとして警告する必要があるだろうか。筆者は中学生の素朴なひらめきをむしろ支持したい。

次の質問は“**that**”である。「どの **that** ももともと、『ほら、あれ、』の『あれ』でしょ？」大胆なものである。確かに **that** はその起源を **the** とする指示的な意味を持ち、次に来ることばをつなぐという認識がある。I think **that** の“**that**”も彼らにとっては「ほら、そら、それ、あれ」でしかない。筆者は大学生の授業でも、「ほら、つまり、あれあれ…」の「あれ、それ」にあたる軽い、ことばをつなぐものとして捉えていいといっている。そもそも日本語の「あのね、」「あのう…その…」という時の「あの」「その」も、話者が次の話題を接続させようとする点で、元は **that** に近いのではないか。そうすれば、関係代名詞（筆者は説明代名詞と呼んでいる）の **that**, **who**, **which** の存在もみな同じように、「次の話題を接続させて説明するもの」として彼らの意識の中に軽く浸透してゆく。以下のような文型で関係代名詞を自分のものにさせることができる。

・ロボット…ほら、あれ、～ができるあれ、→ **Robots that can ~, Robots which can ~,**

英文法学者たちから大目玉を食らうかもしれないが、不定詞の副詞的用法とは、接続詞とは、関係代名詞とは、などとかしこまって押し付けるより、学習者の目線で一緒に進みながら、こうした「接続」や「説明」が必要になったとき、自然に導入し、この文型を使って練習させてゆくうちに、慣れてくる。そしてついには学生たちから「不定詞って、接続詞って、便利だなあ。関係代名詞って、便利だなあ」と言ってもらえるようになる。これが「ああそうか文法」である。これは何も中学生に限ったことではない。

大学生でも十分に楽しんで復習してくれる。

5) ダイアログの作成

パタン・プラクティスのためのダイアログは、一般にダイアログそのものが複雑で、しかも内容的にもあまり面白くないものが多い。その典型は学校の英語教科書の各レッスンに見られる。印象に残る内容にはいまだめぐり合つたことがない。あらかじめ決められた構文・単語に縛られているので、人工的にならざるを得ない。筆者の方法は、時にはナンセンスに映ることも否めないが、使う構文は徹底的に頻繁に使うこと、たとえば、A: I have to ~絵カード。

B: Do you have to ~?

A: Yes, I have to ~.

これは親子の会話に見られる繰り返し現象である。親が自然と子どものことばを繰り返してやる様子を再現したものだ。間違っていたらそのとき親が以下のように、ごく自然に時制を訂正してやる。そうすると自然な会話の流れを止めることがないし、相手に訂正されたという感じを与えない。

子: I go on a picnic yesterday.

親: Oh, you *went* on a picnic yesterday?

子: Yes, I *went* on a picnic yesterday.

また、ダイアログ自体、すべて同じ形式で整えることで、学習者がダイアログを覚える負担を極度に軽減し、自然に覚えることにつながる。筆者はこれを“ナンセンス・ダイアログ”と呼んでいる。例を示す。

カードをめくりながら

A: “I’d like to ~絵カード.”

B: “Do you like to ~?”

A: “Yes, I’d like to ~. Will you ~with me?”

B: “No, I won’t ~.”

A: “Why?”

B: “Because I don’t like to ~.”

i) 文の広がり面白さ

限られた単語内で、できるだけ多くの組み合わせ文 (Novel Sentences) を創作させ、しゃべらせた後、書か

せる。この文型を元に、疑問、否定、肯定、未来形、進行形、完了、受身形を使って発話させる。次に文の前後に句、節を添加させて文を広げさせる。中学生に不定詞を教える場合を例にとろう。

一人の中学生が“I go to school”のカードを発声したあと、「学校に何しにゆくかをいいたいなあ」といって、“study in the classroom”のカードを横にくっつけた。次々と、関連するカードを集めた。“I go to school and study in the classroom, etc.”と言い出した。

そこで私は待っていましたとばかり、「andの代わりにtoをつけるともっと強く引つつくよ。」学生たちはI go to school to study in the classroom. I go to school to speak English. …といいながら目をキラキラさせて、「すごい」「この後ろに every day 入れたら」といいながら次のカードをめくる。

“I go to school to sing a song every day.”

「これでいい？」

「すごい。」すごい連発だ。(実際はもちろんみんな文法の規則としての知識は持っているのだが、それが自分自身の口から使える喜びに興奮しているのだ。)

「toってことばをつなぐのに便利ですね。」

「こんな長い文を英語で言えるなんてはじめて。私すごい。」

こうして自分たちで英文を発明して行くところに、ことば遊びの喜びが隠されている²⁴⁾。この経験を元に、“I'd like to go to the ~ to ~ this morning.”の文型へ、そしてついには本学の建学精神のひとつ“I'd like to make people happy by ~ ing ~.”にたどり着く。

6) パタン・プラクティス（文型練習）について

i) パタン・プラクティスの悲劇

日本では1960年代の構造言語学の隆盛とともに、英語教育にはなくてはならない訓練のひとつとしてパタン・プラクティスが重要視されていた。これは特に初歩の言語学習において有効な実技であった²⁵⁾。ただしこれは決して模倣ではない。刺激として次々と紙芝居のように現われる絵カードを見ながら、それをもとに、今まで口に出したこ

とがないような新奇な発話 (Novel Utterance) を次々と生み出す作業であって、その間にターゲット文型が定着するという訓練である。

ところが、四半世紀が過ぎた今、日本の大学生の英語表現にはごく初歩的な間違いが多いことが報告されている²⁶⁾。2011年7月に本学学生を対象に行ったアンケート調査によると、約62%の学生が中学・高校でほとんどの訓練を受けたことがないと回答している。6年間入試のための机上の文法規則の暗記が中心で、at morning, Is they~, He sister is など、ことばの実際の訓練を受けていないことが歴然としてわかる。本当は基礎力の十分でない学生ほどパタン・プラクティスが必要で、論理的よりむしろ行動的な学習者には最適な練習といえるにもかかわらず、発音矯正や文法指導ばかりを指導してきた結果と思われる。

学生たちの声を聞くと、「現在進行形」、「不定詞の副詞的用法」、「関係代名詞の非制限的用法」「仮定法過去完了」等、全員そのことばを耳にしているという。しかしそれらが何であるかを知らない。それでいいのだ。ましてやどのように使うのかも知らない。実際に使ったためしもないという。しかしこのようなことばのために、英語というのはとても高度で難しいものだど錯覚してしまった。

日本ではこのパタン・プラクティスの大切さが実証され始めたころ、生成文法の異常ともいえる爆発的な流行の中であえなく姿を消した。その理由はごく単純だ。提唱者N.チョムスキーの「人は生まれつきことばを創り出す機能が備わっている」とする理論を、当時の学者たちは、「それならわざわざ練習させるには及ばない」と誤解し、日本中の中・高の英語教師にパタン・プラクティスの無意味さを「鳩やネズミにことばを教えるやり方」というキャッチ・フレーズで吹き込み、廃止に追い込んだ。これは一生懸命に自転車の練習をしている子どもをあざ笑うに等しい。

それを取って代わったのが当時ミミズの輪切りといわれたように、かれらは個々の発音や文法のルールを子どもたちの頭の中に詰め込んだ。以来、英語をしゃべるとき、日本の若者たちを、文法や発音などを常時意識しなくては

おれないようなパニックに陥れる状況を作り、あげくは文法面でも実際面でも使えなくなり、今に至っている。筆者は当時を振り返りながら、生成文法熱が治まった今、再びこのパタン・プラクティスの大切さを学生たちに理解してもらうために、鳩やネズミといわれようが、一回の授業の中で、500 から、多いときには千数百もの英文を学生たちと繰り返し口にする。

ではパタン・プラクティスの原理と方法を卓近な例から説明しよう。

ii) 「津波の心配はありません」

人は自動的にさまざまな行動をとっている。駅の階段を駆け上がる。右足のあと左を、その次に右足・・・などと考えながら上がるものなら、足が絡んでしまう。ことばのいい例は、日本に来た外国人が一番に覚える日本語は「新発売！」だ。テレビで毎日 CM をやっているから、刺激→反応のプロセスで体が覚えてしまっている。

この数年にわたって日本国中、ラジオ・テレビでまるで CM のように「〇〇地方で地震がありました。津波の心配はありません」のアナウンサーの速報が毎日のように全国に鳴り響く。それは同期されて耳と体に反応する。調査をしてみると、予想通り学生たち 63 名のうち 56 名 (89%) が「地震」という刺激語に対して「津波の心配はありません」と即座に反応した。このために地震といわれても安心して逃げ遅れる人がいるとすれば、これは大変なことになる。パタン・プラクティスというのは、一方ではこれほどのインパクトがあるという証拠である。

iii) パタン・プラクティスの方法

パタン・プラクティスでは、「不定詞名詞的用法」などと、ものものしく文法を教えなくても、たとえば“I like to ~”というターゲット文型のもとに絵カードを使って、

I like to play the piano.

ギター絵カードをみせて

I like to play the guitar.

自転車に乗っている絵カードを見せて

I like to ride a bike.

というように多量の練習量とスピードを重視して進めてゆく。一回の授業の中で、500 から、多いときには千数百もの英文を繰り返し口にし、あるいは作文するこの練習は、言語学習にとって欠かせないものである。これは一輪車の練習にたとえることができる。

7) 推理力の養成

推理力は人間だけでなく生物の持って生まれた才能であり、創造力の原点である。中でも学生たちの最も不得意とする語彙力の不足は、この推理力の発揮次第で乗り切ることができるかと筆者は考えてきた。その例を次に示そう。下の英文は新聞記事である。

Studio Ghibli protests against nuclear power

Kyodo News

Studio Ghibli Inc. has displayed an anti-nuclear power banner at its headquarters in Koganei, Tokyo, at the initiative of noted animator Hayao Miyazaki.

The banner was placed on the roof of the building on Thursday and reads, “Studio Ghibli doesn’t want to make movies using electricity generated by nuclear power plants.”²⁷⁾

辞書も使わず、約 15 分間の奮闘の結果、Y.M.さんの提出した要約は次のとおりとなった。

スタジオジブリ株式会社東京小金井の先頭の、有名なアニメーター宮崎駿は、火曜日、建てる屋根に次のように読まれている。「スタジオジブリは、映画をつくるつもりはない。工場？によって、新しくつくられた力（エネルギー）電気？（原子力？）はつかいたくない」と。

全 59 の単語から成る記事のうち、英語が嫌いだという Y.M.さんの未知の単語は、16 語（約 27%）であった。解説をしてみよう。

Inc.は「株式会社」と、initiative は「先頭」、noted は「有名な」と推理し訳した。nuclear power のうち

nuclear は nu を new の異形と考えたようで、「新しく作られた」と推理し、power は「力」だと知っていたものの、何の力かを推理するのに苦労した結果、「新しくつくられた力（エネルギー）」と。次に by …plants は「工場？」そしてついに electricity を「電気？（原子力？）」まで推理した。ここまでできれば十分であろう。見事である。本人をほめてあげると、とても喜んでくれた。

このように、辞書がなくても学生たちは推理を働かせば、次々と未知の単語も前後からの判断、そして文全体からの判断を元に、理解してゆく力を持っているだけでなく、それを楽しんでいる。たとえば“exciting”という単語を自然の言語環境で学習してゆく場合、これはなかなか和訳しづらい語だが、何度となくこの語が使われている場面に遭遇しているうちに、「こわい」、「ドキドキ」、「ハラハラ」、「わくわく」、「興奮する」などと経験して初めて自分のものになる。

筆者はこれをクラスでは、学生たちが描いた数千枚もの絵カードから選りすぐりの例を使って再現する。こんなこともしないで、いきなり和訳を教えたりすぐに辞書を引かせるのは、まさに「teaching（教える）」であって、「educing（引き出す）」ことにならない。このような能力を無視して、ただ闇雲に分厚い辞書を常時引かせて、学生の持てる推理力を引き出さないのでは実にもったいない。辞書は何時間も推理したあげくに確認のために使う「解答集」である。

8) 授業の成果

さて、筆者が 2011 年 4 月の授業の最初に行った英語に関するアンケート調査を、7 月の最終授業で再び実施した。その結果、4 月の段階では 3 クラス全 120 名全員が「自分の英語に自信がない」と答えていたが、4 ヶ月後の 7 月のアンケートでは 13.1%が「自信がある」と回答した。また、64.7%の「英語が嫌い」な学生が、51.7%に減少し、「自分自身の英語を嫌い」と思っていた学生が、95.9%から 84.3%に減少した。また、「一般に日本人の英語を下手」だと思っていた 67.2%が 32.2%に減少した。さらに英米人の英語をカッコいいと感じていた 76.4%が、

58.4%に減少した。

今後の目標については、「べらべらとうまく話せるようになりたい」という希望を持っていた学生が 30.9%から 11.2%へと減少、代わりに「別にべらべらとうまく話せなくても、せめて意味が伝えればいい」と思っていた 39.0%の学生が 52.8%へと増加した。また、最終授業のアンケートで、授業中の「パタン・プラクティスは退屈でしたか？」に対して、93.8%の学生が「いいえ」と答えた。パタン・プラクティスを通じ、総じての結果は、85.1%の学生が「とても身についた」もしくは「身についた」という回答をしている。また、今後英語に対して「やる気が出た」、「やる気が少し出た」、という学生は 60.7%であった。

さらに、「英語ができないのは自分の責任ですか？」は、「いいえ」が 4 月の 17.9%から 7 月には 38.7%に増加した。その理由のほとんどが「教師の教え方、英語に対する考え方の改善が必要」と書かれていた。

4 ヶ月間、授業時数 22 時間 30 分（全 15 回）にわたる本授業における改善率は、各々 20%前後かそれ以下であった。しかし、学生たちの *Open Japanese* に対する関心は前向きになり、自分の英語に対する嫌悪感が少しは薄らいだのではないかと考えられる。

結びにかえて

1) ことばの個性と創造性

思い起こせば、平安期の「漢字」から「かな」への移行は、苦渋の歴史を切り開く中で、日本人の文化生活に実に思い切った大きな飛躍をもたらした。

年を経て戦後民主主義の時代になり、個性を持ってもいいという、自分の考え、言うべきことを自分のことばで発言できることの喜びを味わえるチャンスが再びやって来た。

ところがそれもつかの間、日本の英語教育は外に向かつて発するはずの子どもたちのことばを閉じ込めてしまった。毎日、日本の学校の英語授業で何億と発せられる子どもたちの、日本人としての個性の詰まった *Open Japanese* の多くは、まじめで潔癖な英語教師たちから誤った英語として指摘され、屑籠に入れられる。世界諸英語の視点から

すれば、こんな大きな無駄と無知はない。このように、発音・文法など何が何でも潔癖に完璧を目指してネイティブを目指してきたその付けが今、学生たちの「沈黙」となって現れている。

しかし、ことばの能力を秘めた学生たちも、打ち出の小槌と同様、振らねばことばは出てこない。その壁を打ち破るのがパターン・プラクティスだと筆者は考え、中・高での訓練不足が明らかとなった今、大学生を相手にそれを実践してきた。だが、パターン・プラクティスのような機械的な訓練をさせるところから個性や創造性が育まれるだろうか、という疑問は残る。しかし、ついには退屈になって飽きにくるだろう。だが、そこまでやったとき、得たものが大きいことに気づくはずだと信じるほかない。

総じて学習量としては十分ではなかったが、活動の報酬としての基本的な分野の単語の練習による、自動的なことばの習得結果に自信が身についたことがわかった。こうした自信が先について、続いて最近とみに個性豊かで新奇な英文が口から出てくるようになった。ことばの創造が見えはじめたのではないかと考える。

2) *Open Japanese* の役割

Open Japanese が果たす役割のひとつとして、誰にとっても「困難な発音の平易化」、「語順の日本語化 (Japanization of English Word Order)」などがあり、*Open Japanese* を使うことで無理なく、自然なかたちで日本語の発音や語順の意義を、世界に向けて紹介することにつながることを述べた。英語の侵入とか、英語帝国主義などと目くらまを立てる前に、*Open Japanese* を駆使しながらこうして一步一步地道に、深く静かに日本語のすばらしさを世界に紹介することができることも、ここで再び強調したい。

Open Japanese はこのようにして、世界の *Open Languages* の中でこれからも世界から注目され、先導的な役目を担いながら、さらには *Standard Open Language* への発展に、大いに寄与することが期待される。

註 1) 岡村光浩、「神戸芸術工科大学における英語教育に

ついて一現状と展望」、『神戸芸術工科大学紀要芸術工学』、2009. <http://kiyou.kobe-du.ac.jp/09/thesis/07-01.html>

註 2) 末延岑生、「ニホン英語」、本名信行編、『アジアの英語 *Varieties of English in Asia*』、くろしお出版、1990.

註 3) 文部科学省、『中学校外国語学習指導要領解説』、2009、pp12-31

註 4) 星野由子、「単語の音声指導」、『英語教育』、大修館書店、2010.6、p.61.

註 5) 大高博美、『油断大敵』な英語の鼻音、『英語教育』、2009年8月、p.60.

註 6) 神山孝夫、『脱・日本なまり』、大阪大学出版会、2008.4.

註 7) 島岡丘、『日本語からスーパーネイティブの英語へ』、創拓社、2004.

註 8) 小林美代子、『聞ける！話せる！英語力3ヶ月トレーニング』、研究社 2006.10.

註 9) 『アエラ』、朝日新聞出版、2008.10.13.

註 10) マーク・ピーターセン、『日本人の英語』、岩波新書、1988.

註 11) 田中克彦、『ことばと国家』、岩波新書 1981、p.216.

註 12) 大津由紀雄編著、『危機に立つ日本の英語教育』、慶應義塾大学出版会、2009、p.26.

註 13) Larry Smith, *et.al.* English for Cross-Cultural Communication: The Question of Intelligibility, *TESOL Quarterly*, Vol. 13, No.3, Sept. 1979.

註 14) Suenobu, M., *et.al.* An Experimental Study of Intelligibility of English Spoken by Non-Natives, 『大学英語教育学会紀要』 No.18, The Japan Association of College English Teachers. Japan., 1987.

註 15) KUC Monograph LX, The Institute of Economic, Research, Kobe University of Commerce, Kobe. 279 pp., 1999. 3.

註 16) 『英語教育』、大修館書店、2009.8、p.26.

註 17) 金谷武洋、『英語にも主語はなかった』、講談社、2004.1.

註 18) 『文部省中学校検定英語教科書: *Total English Course 1.2.3*』、(中島文雄他との共編)、秀文出版、1981.

註 19) 本名信行『世界の英語を歩く』集英社、2003.11、p.187.

註 20) Suenobu, Mineo, *Errorology in English*, Yugetsu Shobo, Kobe, 2002.

註 21) 末延岑生、『英語学習ゲーム』、K.K.語研 1970.12、末延岑生『続・英語学習ゲーム』1977.7、末延岑生『1000文英語カード・ゲーム』ユニコム 2006.12、Suenobu, Mineo, *Adapting a Japanese Card Game into Foreign Language Teaching*, *Modern English Teacher*, Vol. 13.No. 2, Modern English Publications, Oxford England, Winter 1985.6.

註 22) Suenobu, M., *Information Transmission of English by Japanese Learners of English*. *International*

Review of Applied Linguistics in Language Teaching. 35(3), Julius Groos Verlag, Heidelberg, 1997. 8. Suenobu, M., et.al.

註 23) 齊藤兆史、『これが正しい！英語学習法』、筑摩書房、2007.4 p.51.

註 24) 文法家はこの面白さを知らない。この楽しさを学生たちに与える喜びを知らない。彼らは、不定詞という三つの用法があつて、この場合はそのうちの副詞的用法だと教える。私は不定詞の三つの用法も、元はといえば、遠い先祖たちがこのようにして工夫しながらさまざまな用法を発達させていったもの、と推測する。それを今、授業の中で、先祖帰りをしながら学生たちが自ら実践しているのだ。

註 25) 末延岑生、「Pattern Practice の類型化研究」、*Language Laboratory* No.8. The Language Laboratory Association 1968.

註 26) Suenobu, M., *From Error To Intelligibility*, Shubun International, Tokyo. 1988.8.

註 27) The Daily Yomiuri July 21,2011.

図版出典：

図 1) Tay, Marry “The Uses, Users, and Features of English in Singapore.” In Pride ed.1982.

図 2) 筆者作成

図 3)末延岑生、『続・英語学習ゲーム』、K.K.語研、1977.7.